



“心豊かに
笑顔あふれる”

青森県
総合社会教育センター

響

所報〈ひびき〉

No.
101

平成27年 2月19日

講座受講生ビフォーアフター
パワフルAOMORI!創造塾

工藤 一也 さん



Q.受講のきっかけ

知人の紹介で「パワフル AOMORI! 創造塾」を知り、40才を前に自己啓発を図りたいと思い立ったのがきっかけでした。塾生として活動していくうちに、地域を盛り上げる活動にハマってしまい、今は、創造塾で知り合った仲間と様々な活動に参加させて頂いています。

Q.講座受講により得たもの

まず様々な活動を進める上でのノウハウ、そして何よりもネットワークが広がった事です。塾生同士のつながりはもちろん、講師の方々、実施した事業に関わる方々とのつながりは、以前の私には考えられないものです。これこそ一番の成果であり、これからも大切にしていきたいと思っています。

Q.今後の目標

一人でも多くの「イクメン・カジダン」なパパさんを誕生させ、幸せあふれる家庭を増やしていきたいです。また、三沢のご当地ヒーロー「ホッキーガイ」は、まだまだ認知度が低いので、市内や他市町村のイベント等に数多く参加し、活躍の場を広げていきたいと思っています。

活動紹介1 パフォーマンスライブ

塾生当時から継続しているこのライブは、演者と裏方の双方を高校生が行い、表現する喜びや世代を超えた交流を体験してもらうことを狙いとして実施しています。2月に5回目を実施しましたが、高校生と協働して1つのショーを作り上げる達成感、何度やってもたまりません。



活動紹介2

イクメン・カジダン講座

三沢市の市民提案事業の補助を受け実施しています。子育ては義務ではなく今しかできない『期間限定の特権!』を楽しみながら、積極的に子育てや家事を行うパパが増えればと、昨年度から講座を始めました。受講したパパから「家でもお弁当を作って家族に食べさせたい。」「帰ったら、早速読み聞かせしてみよう。」等の感想を頂き、ご家庭での様子を想像すると、ニヤけてしまいます。

笑顔のパパが一人でも増えるよう、これからも活動を続けていきたいと思っています。

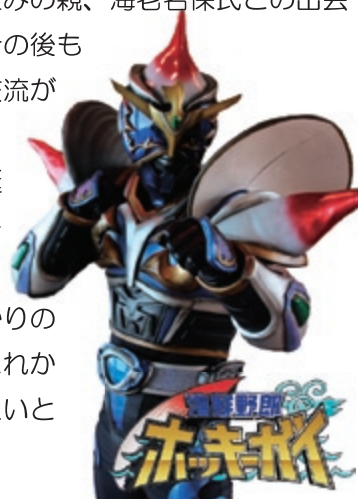
パパ料理研究家
滝村雅治さんをお招きしての
26年度第2回講座
「家族につくってあげたい パパがつくる幸せパパごはん」



活動紹介3 ホッキーガイプロジェクト

創造塾で講師を務めた、秋田県のご当地ヒーロー「超神ネイガー」の生みの親、海老名保氏との出会いがきっかけです。その後も塾生と海老名氏との交流が続き、海老名氏全面バックアップの下、誕生したのが「ホッキーガイ」です。

まだ、誕生したばかりの「ホッキーガイ」をこれから大活躍させていきたいと思っています。



“最高の黒子日本一”を目指して

廣瀬：それでは、石岡さんの報告をしていた
だきたいと思います。

石岡：秋田市から来た石岡大輔です。生命保
険会社で、ライフプランナーという仕事をし
ています。その合間に、ちょっとデカい趣味
というポジションで、いろんなことをしてい
ます。

急に大きな話になるのですが、僕の人生理
念は、御縁のあった人が天寿を全うするとき
に「ああ、最高の人生だったな」と言ってい
ただくことです。「最高の黒子日本一」とい
うテーマで僕は活動しています。

輪茶プロジェクトは、私の母が会計をやり、
助産師の妻が子育て関係を担当し、残りの全
てを僕がやるというスタイルで運営してお
ります。いろんなジャンルのイベントをやっ
ているのですが、僕がやりたいというよりは、
誰かから、「こんなのやりたいのだけど、こ
んなふうにはやれら面白くないね」と持ちかけ
られたことを、じゃあどうやればできるかな
と僕が考え、一緒にやまじょうという感じ
でやっています。

廣瀬：要するに、一緒に企画したり、アドバ
イスしたり、コンサルしたりしながらやって
いくエージェントという感じですかね。これ
はね、いきなりそういうことができたのでは
ないと思うのですよ。最初のきっかけを教え
てくれませんか。

石岡：7年前に秋田市議選挙に出たことがあ
ります。落選したのですが、その時、まちお
こしくらい政治家でなくてもさうりやっ
てやる、と思ったのです。それで、作家さん
とかの力を借りて、おしゃれフリーペーパー

の中に、僕らの情報を入れていこうというの
がスタートです。それから、御縁のあったお
店からイベントを企画してよ、と依頼されて
やってきたことが、少しずつ増えてきたとい
う感じです。



輪茶プロジェクト
代表 石岡大輔氏

廣瀬：その費用はどこから捻出しているの
ですか。

石岡：最初は、毎月のお小遣いを五千円ずつ
貯めていって、一万五千円でフリーペーパー
を作るというところからスタートしていま
す。

廣瀬：全くの自己資金ですか。

石岡：「広告費はいらないので、仲良くして
ください」というイメージで始めたので、赤
字でいいと思っていました。ですけど、この
ままだと続けていけないと気づいたので、今
イベントの収益のところにフリーペーパー
の発行分を上乗せして参加費を徴収するこ
うスタイルでやっています。ですので、赤
字にはならないんですけど、黒字もないとい
う感じです。

廣瀬：黒字にならないとつらいくないですか。
石岡：正直、僕が発信したいことを無料でや
らせてもらっているという感覚があるので、
僕としては費用対効果が非常に高いと思っ
ています。

廣瀬：なるほど。石岡さんは、自分の情報を
発信するために、フリーペーパーを作りなが
らイベントをして、赤字にならない程度に受
託料をもらっているということですね。少し
は黒字になるように考えませんか。

石岡：よく言われます。ただ、イベントの中
で一番動いているのは僕ですけど、一番楽し
んでいるのも自分だという感覚があるので、
それでいいと思っています。

廣瀬：いい人ですね。本当に驚きました。

“ まちの大人の部活 ”

廣瀬：最後に白銀町から来ていただきました
清水さんから、お願いします。

清水：私は、八戸市の白銀町育ちで、学生時
代は山形で暮らしました。地元へ帰ってきて
自分達の遊び場がほしいと思ったことが活
動のきっかけです。そこで、私の妄想をスケ
ッチブックに描き出しました。それを持って
同級生に猛アタックをかけ、二人で soap
(スープ)を作ったのが始まりです。その後、
同窓会でスカウトして、十人くらいで活動し
ています。

最初は、歩いて活動場所探しでした。実は、
白銀には、歴史や文化、水を中心とした文化
があって、そういう魅力が集まっている場所
だということに、今、大人になってやっと気
づいたのです。すると、誰も見向きもしない
ような荒れた公園が見つかったのです。そこ
で、町内会長さんにお話したところ、何をや
ってもいいと言うので、そこを活動場所にし
ました。もろってきたひまわりの種を植えて、
花畑にしたのです。それから、十二月に、み
んなで集まってわいわいやるって、「キャン
ドルナイト」といって、お金のかからないイベ

ントをしました。

先生から、瓦解というお話がありましたが、
この一年が正にその年でした。仲間が結婚し
たり、転勤したり、みんなのバクトルがかわ
っていったしまったのです。

お金のことに限っては、補助金とかそいう
ものをもらわず、自分達で資金を遣り繰り
しています。実際にイベントを行うときは町
内会からの賛助金などを当てにしています。
集まったお金は、みんなの気持ち
が集まっているということを、自分の気持ち
の中に留めながら開催しています。



soap!
代表 清水圭子氏

廣瀬：普通は、屋根のついたところに集まり
たいと思うのですが、いきなり公園に活動の
拠点を求めたのは、なぜですか。

清水：ハードの部分を求めたのではなくて、
何も人脈がなくても集まれる、例えば、サー
クルがあるよと言われると、行くかなとい
う気持ちになると思うのですが、その受け皿
を求めたのです。

廣瀬：なるほど。「まちの大人の部活」とい
う感じですかね。部活だと考えてみれば、い
ろいろなことがストンと落ちるような気が
しますね。ありがとうございます。

廣瀬：今日の講座に参加している高校生や大
学生のみなさんの数が、とても多いことに驚
きました。青森県の未来は明るいと思います。

パワフルAOMORI! 創造塾 公開講座

「未来のAOMORIを地域から」

「パワフルAOMORI! 創造塾」は、その名前のとおり、元気な青森を創造する人材を育成する塾です。第3回目となる公開講座が1月10日に開催されました。この日現在としては、青森市で48年ぶりに積雪が120センチを超え、大雪の中にもかかわらず、多くの県民が集まっていたきました。

今回の公開講座では、まちづくりのスペシャリストである宇都宮大学地域連携教育研究センターの廣瀬隆人教授をお招きして、青森と秋田の若手の活動実践者とともに、まちづくりのポイントについて、パネルディスカッションをしていただきました。「まちづくりって、どうやっていいのだろう」「なにか進めていけばいいのだろう」と悩んでいる方には必見です。



宇都宮大学
地域連携教育研究センター
教授 廣瀬隆人氏

まちづくりは“まち変え”

廣瀬：「まちづくり」というのは、とても分かりやすく言ったら、「まちを書き換えよう」ということです。書き換える「まち変え」なのです。それには、四つの視点が重要です。

まず「地域の人たちが、出会って、語り合っ、触れ合う場を作る」ことで、まちは変えられます。次に「地域で楽しく暮らすために、地域の資源を理解すること」です。まちにあるものを探していくということです。実は「食」と「文化」を探すと、人がつながります。美味しい食べ物はみなさん好きです。で、食に関することではつながることがで

きます。もう一つは文化です。そのまちの文化とか芸術とか、そういうものに人間は安定感を求めるのです。「食」と「文化」がまちづくりを支える大きなポイントになります。三つ目は「地域で安心して、安全に暮らせるようにすること」です。安全の問題というのは、まちづくりと切り離すことができません。最後は「地域の課題を発見して、解決すること」です。地域と密着した地元の課題を解決していくこととつながっていかねばなりません。

“アート”のまちづくり

廣瀬：それでは、まず最初に、田村さんから行きましょうかね。

田村：青森県三沢市で生まれ育ってきた田村宣喜です。三沢市役所で働いています。私は、東京の大学に通い、仙台の大学院を修了してから三沢に戻ってきました。仕事で「三沢ホッピ」を担当したことを契機に、地域づくりに関心を持つようになり、Misawa Art Project（ミサワアートプロジェクト）を立ち上げました。「食」と「文化」ですと

「子どもカメラン」という企画をしました。これは、子ども達がカメランとして地域を取材することを通して、地域の良さとか、農業と漁業の文化とかを知ってもらおうと考えたものです。こういう形で、地域と人がつながる仕組みを作りたいと思って、活動しています。

廣瀬：アートプロジェクトの「アート」について説明していただけませんか。

田村：地域活性化というところ、お金を先に考える人がいるのですが、僕は金じゃないよと思いつき言いたいのです。そのときに、お金と全然違うのが芸術です。芸術は、個性がある。「芸術は一人一人が大事だよ。一人一人が作品だよ」「だから、あなたはこの地域に必要です」というところを出したかったのでも「アート」にしたのです。



Misawa Art Project
代表 田村宣喜氏

廣瀬：「あなたはこの地域に必要です」と言いましたね。それは、どういう意図で言いましたか。実は、まちづくりの大きなキーワードなのです。

田村：一人一人は、すごく大事じゃないですか。親から見ると、子どもはどんな子どもであれ、すごく大事ですよ。一人一人が掛け替えのないもので、社会の中でも、君が思っている以上に君を大事に思っている人がいる

よということを感じてほしい、まちに必要なだということを感じたかったのです。それを表現したかったというのが僕の想いです。

廣瀬：実は、「あなたはこの地域に必要なのだ」という肯定感がとても大事なのです。「人に必要とされること」「人の役に立つこと」「人に愛されること」「人に誉められること」。この四つは、人間が生きていくためにとても重要なことなのです。このことが、田村さん自身の生きがいにもつながっているし、まちづくりの大きな機動力になっているのです。活動を企画する人は何人ですか。田村：本当に「コア」ということになれば、二人といつもいいくらいですね。

廣瀬：まちづくり活動をするときに必要な人数は、四人以下なのです。それ以上になると、瓦解する可能性が強くなるのです。まちづくりのスタートさせるときには、三、四人から始めるというのが鉄則なのです。

廣瀬：最後に、御家族との関係を手く保っているような工夫をしていますか。

田村：私が家族と接して思うことは、時間の長さがイコール絆の強さとはちがうと思うのです。時間だけは取り返しがつかないものなので、家族とコミュニケーションをしながら、きちんとした時間の使い方を決めています。

廣瀬：非常にいい考え方を提示していただけたかと思えます。田村さんの活動は、三沢の地域エネルギーをそこに固めていく、接着剤のように見えます。それが「アート」なのですね。「アート」とは個性があって、人の心を大事にする、そういうキーワードをもった言葉なのですね。

我がまちの〇〇自慢！

「もったいないの精神が生きる社会づくり」

中泊町では、「中泊町もったいない町民運動による循環型まちづくり条例」を定め、もったいないの精神が生きる社会づくりを進めています。今年度は、災害から命を守るという側面から「もったいない命、もったいない心」を啓発する「もったいない町民大会」を開催しました。その中の活動の一つ「小泊地区防災探検隊」について紹介します。

小泊地区は昭和58年の日本海中部地震の津波により、大きな被害を受けました。災害から身を守るためには、常に災害を意識し、危険箇所や避難場所を確認しておくことが大切です。そこで、子ども達には自分達の住む地域に普段から目を向けさせ、有事の際、自分の命は自分で守ることを意識づけさせたいとの思いから、防災探検を計画しました。

防災探検隊は、子ども会の合同交流キャンプのプログラム（防災オリエンテーリング）に取り入れて開催されました。

「小泊地区防災探検隊」

キャンプ当日は、子ども会の育成者とともに町内の危険箇所を歩いて回りました。また探検後には防災マップづくりに取り組み、11月に開催した「もったいない町民大会」で防災マップを基に活動について発表し、万が一の災害



に対応できるよう地域住民に対して啓発を行いました。参加した子ども達からは、「小泊の危険な場所や避難場所がなかった。自分の命は自分で守らなければいけないと思った。」という



声が聞かれ、子どもたちの中にも防災に対する意識が芽生えてきているように感じました。

やってみよう！アイスブレイク

★できる！役立つ！楽しい！ ★講座・研修会・仲間づくりの場で！

☆「4つの窓(私を知って!)」(5～10分、何人でも 準備：B5判又はA4判の紙を人数分)

●すすめかた●

- (1) 紙を折って四分割し、下図の項目について書き込んでもらいます。
 - (2) 記入後、その紙をもとに多くの人と自己紹介をし合います。
- ※ 書き込む項目に「好きな芸能人」、「好きなテレビ番組」などを設けてもよいでしょう。

★ポイント★

グループ内での自己紹介にも使えます。書いてもらう項目は、誰でも書けるものにして、研修会等の場合は、テーマに関連のある事項を入れるなど工夫するとよいでしょう。



名前 (ふりがな)	このまちの 好きなところ
最近うれしかったこと	好きな食べ物

*第100号第4面「やってみよう！アイスブレイク」において、掲載されているQRコードが正しく読み取れない不具合がありましたので、こちらをご活用下さい。



キャッチ



自己紹介

青森県総合社会教育センター

検索

〒030-0111 青森市荒川字藤戸119-7 TEL 017-739-1252 FAX 017-739-1279 <http://www.alis.pref.aomori.lg.jp/>